

短歌の部

伊勢方信 選

☆☆ 特 選 ☆☆

老境に入りし娘の声優し時雨のような淋しさがくる

大分市 浦田 照

老いの境遇に達した娘の声が、母親への慈しみを、厚くしてきたことが感じられる。

これからの親娘の歩む老後の生き方を思うとき、不意に湧いてくる淋しさを「時雨のよう」ととらえて、歌境を深めている。

☆☆ 入 選 ☆

つらう履くつ下に満足す気づけば亡母に似たる生き方

大分市 城井 俊子

靴下に限らず、生前の母が繕ってくれたすべてに、子どもへの愛しみが流れていることの、尊さに気づいた作者の思いは深い。

諍ひし遠き記憶を偲びつつ野道に母の車椅子押す

豊後大野市 加藤 賢二

世代の違いで、何かにつけて衝突することの多かった母。加齢によつて、当時の母の気持ちちが自分のものとなった。下の句が重い。

急逝の父の遺品の中にある五年日記の二年の余白

宇佐市 後藤 明彦

「二年の余白」が訴える、急逝の父の無念を、真正面から受け止めている作者の無念が、我がごとのように伝わってくる。

山本和可子 選

☆☆ 特 選 ☆☆

「さびしいね」吾の問ひかけを野良猫は大き欠伸に一呑みしたり

中津市 深蔵 一子

絵本の名作「100万回生きたねこ」を思い出す。淋しくなんかない野良猫の悠然たる大欠伸が一呑みしたのはお婆さんの淋しさではないか。哲学的思考の歌をゆつたりとした空間の中にリアルに描いた秀作。

☆☆ 入 選 ☆

九十路で迎え送りに支えられ古文書詩吟の教壇楽しむ

大分市 佐藤 満洋

人生百年時代の生き方を示す歌。卒寿になつても教えを請う生徒がいる。送迎して支えてくれる方への感謝が滲み、率直な表現が魅力。

連れ合いて七十年を迎えし日仲人の墓を妻と掃除す

国東市 糸永 光

若くして難しい選択を迫られる結婚。婚七十年の幸せは仲人あつてこそ墓掃除で感謝を捧げるふたりは夫婦の鑑、人間の鑑である。

この年も鹿の声なく過疎の里木の葉時雨の秋は過ぎゆく

佐伯市 河野 龍子

晩秋の鹿の恋は忙しく雨でも鳴くのか古歌に夕時雨と鹿の声を合せた歌も多い。「過疎の里」から「木の葉時雨」に移る韻きが絶妙

太田宅美 選

☆☆ 特 選 ☆☆

黄に染まり赤に染まりてゆうゆうと我が人生の老いを楽しむ

大分市 林 豊海

大雑把な歌と思つたが独自性があり読者に色々と委ねる骨太が好ましい。上の句で黄葉と紅葉を案じさせ、自然界の成行きに身を処し乍ら、くよくよせず、欲張らず、周りと協調することで諍ひなく平和の原点に通。

☆☆ 入 選 ☆

阿蘇岳の山肌白し放牧馬も厩に帰る師走となりぬ

杵築市 伊藤 美佐子

短い秋が急に冬姿に移つた阿蘇五岳を背景に、放牧の馬も冬入りで畜産者へ心を深く寄せている。百米に0.6℃気温低下する自然界だ。

軍服の父の遺影に目守られてわれは八十路の嫗となりぬ

大分市 中釜 淑子

戦地より無事に生まれて欲しいと願い乍ら国に一名を捧げられたお父上に見守られ、一家を支えてくれた母への感謝も内在する。祈、健康。

何よりも嬉しきことよお寺よりお祝ひ届く百歳の母に

別府市 山田 義空

人生百歳時代を実践してくださつた母を菩提寺より真つ先に祝われ、そのうち役所からもだろうが、全国的にはまだ十万人未満だろう。